

杉沢比山縁起

杉沢比山は、山形県飽海郡遊佐町の杉沢に伝わる古い舞です。そして、比山の舞台は村の鎮守である熊野神社です。もとは鳥海山二之王子熊野大権現とよばれ、鳥海修験順峰修徒入峰の二之宿でした。

はっきりとした記録は残っていませんが、その発生は鎌倉時代を下るまいと推定され、鳥海修験の隆盛と衰微の変遷を経るなかで、いつしか修験の徒から村人の手へと受け継がれてきたものと思われます。

比山と読みますが、言葉の意味ははっきりと解明されていません。鳥海山を月山に対し日山と見立てた時代があり、その日山(鳥海山)に伝わる番楽という意味で、日山(比山)番楽と称したのではないかという説をはじめ種々あります。

山伏修験者が行っていた神楽のことを番楽といいます。東北の奥羽山脈を境に太平洋側では山伏神楽と呼び、日本海側では番楽と呼んでいます。これら一連の古風な舞は猿楽、呪師、幸若舞、田楽などが結び付いた独特の舞です。アマハゲで有名な町内北部の女鹿地区にも「女鹿日山」という番楽が伝わっていましたが、近年舞われていません。

杉沢比山は数ある番楽の中でも、すっきりと洗練されユニークな美しい型、水ぎわ立った鮮やかな舞い振りを見せる芸術的価値の高いものと評価されており、昭和53年には国の重要無形民俗文化財に指定されています。

毎年、8月6日「仕組」、15日「本舞」、20日「神送り」の三晩に舞が奉納されます。お盆の時期と重なり昔からの信仰とつながっていると考えられます。演じられる曲目はもともと24曲ありましたが、現在行われている曲は14曲で、全曲を演じますと4時間ほどかかります。静かな山里の星空のもと舞台上で演じられる比山は、時に勇壮に時には荘重な舞で、見ている者の心を打ちます。

折口信夫と杉沢比山

杉沢比山が世に知られる契機となったのは、著名な民俗学者折口信夫との出会いでした。昭和5年、折口は初めての東北旅行で、8月15日比山の「本舞」を見学、大きな感動を受けます。折口は直ちに民俗芸能学者の小寺融吉と本田安次に報せ、同月20日の「神送り」を、小寺、本田の両名が見学しました。同年11月4日、東京の日本青年館において催行された明治神宮鎮座十年大祭奉納公演の実現には、折口らの推挙があったとされます。この時、同月6日には、東京靖国神社能楽堂において、民俗藝術の會主催の単独公演(十五番全曲実演)も行っています。この上京公演以来、杉沢比山は全国にその名を知られるようになりました。

三番叟
明治神宮鎮座十年祭
奉納舞神能杉沢比山
記念絵葉書より



上演のご案内

毎年 8月6日・15日・20日

午後7時頃開演

〔午後9時30分頃終了〕
〔15日本舞は10時30分頃終了〕

会場 杉沢熊野神社



お問い合わせ
杉沢比山保存会
(遊佐町教育委員会文化係内)

TEL.0234-72-5892

国指定
重要無形
民俗文化財

霊峰鳥海山、
旧修験の里に伝わる
独創の番楽。

杉沢

すぎさわひやま

比山



一 番楽

番楽の舞はいわば舞台鎮めとして舞われる。白色の面をつけた一人舞で、岩屋にこもって番楽を舞うことは本当にめでたいと祝う舞である。

二 みかぐら

鳥かぶとをかむり女装して鈴と扇を持って舞う二人舞である。この水は夜昼汲んでも濁ることもない、花の咲くところで静かに舞を舞っていると囃している。

三 おきな

番楽と同じに白色の翁面をつけた一人舞である。長命を祈る舞で、千代八千代と万才を祈り代々久しき翁なりと祝っている。荘重な舞である。

四 三番叟

【さんばそう】

五穀豊穡を祝う舞である。右手に扇、左手に鈴を持ちながら舞う。拍子が早く、足の運びも活発で美しい舞である。

五 景政【かげまさ】

前九年の役、厨川の戦いで八幡太郎義家の家来の鎌倉権五郎景政は鳥海弥三郎（安部宗任）に左眼を射られた。景政はその矢を抜かず三日も弥三郎を探し求めその矢を射返した。景政の勇戦を讃えた舞である。

六 蕨折り

蕨を食べたいという両親の願いで娘が寒中の山に入る。増水した川があり渡れずにいるが、老いた船頭に妻になる約束で渡してもらう。娘は船頭から一日の暇をもらうが、ひとりで待っている船頭のところにドサ（木こり）が来て「娘は天子様の后になって栄華に暮らしている」と嘘を言う。がっかりした船頭は川に身を投げてしまうという舞である。



七 曾我

親の仇討ちをする曾我兄弟の舞である。兄の十郎、弟の五郎は富士の巻狩りに来た親のかたき工藤祐経の館に忍び入り、三太刀ずつ切って本望を遂げる。勇壮な二人舞である。



十 大江山

源頼光と渡辺綱の大江山の鬼退治の場面である。大江山に向かう途中で二人は花園中納言の一人姫に出会う。姫から鬼のことを聞き出すうちに、この様子を見ていた茨木童子という鬼が襲いかかってきてついには退治されるという舞である。

かけ謡

舞の奉納される場所（神社仏閣等）を褒めたたえる神歌は番楽の始まる前に歌われ、囃される。

舞はない。

一種の神下しと考えられる。

「久方の橋のたもとの流れ水、
参る道者のうがひ水かな、水かな、
げに面白のうがひ水かな。」

八 鳥舞

鳥かぶとをかむり、女装して二人で舞う。高天ヶ原の天の岩屋の前で唄った故事にならって、神の御前で雌雄二羽の鶏が戯れあう様を演じたものである。



九 景清【かげきよ】

景清は平家の侍大将で勇猛な武士であった。しかし、平家の滅亡とともに源氏にとらえられ、食を断って死んでしまった。勇名は後世に伝えられ、このような舞として残されている。

十 橋引【はしひき】

深く広い流れの名取川。その川上に立つ杉の木が熊野詣での乙鶴御前という女性に恋をする。そのためついには切られて川に架ける橋にされる話である。ガングツの面をつけたドサ男役のしぐさが滑稽で面白い。

十二 しのぶ

信夫の太郎景時は陸前高館の戦いの時、弓を引いては敵の胸板を射、太刀を振るってはさんざん敵を切り伏せた。この様子を物語った武者の舞である。

十三 高時

傲慢な北条高時が、田楽法師に化けた烏天狗になぶられる有様を舞ったものである。途中に鬼が登場する。

十四 猩々【しょうじょう】

猩々は酒を好む想像上の動物で、親孝行の高風という若者から汲めども汲めども永久に尽きない酒つぼをもらう。赤い装束の猩々役の手が抜き身を切ったり、でんぐり返しをしたり、刀をくわえて逆立ちしたり、曲芸的な演技を見せる。